

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 4 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350717

研究課題名(和文) 広汎性発達障害児のコミュニケーション能力に働きかけるリズム遊びの教材開発

研究課題名(英文) Material Development in Rhythm Playing Teaching for the Improvement of Communicative Competence of Children with Pervasive Developmental Disorders

研究代表者

茅野 理子 (CHINO, Masako)

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号：60125812

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、知的障害教育校の教育課程の一環として行われた集団リズム遊びである5つの教材について、広汎性発達障害児のコミュニケーション能力に働きかける可能性を検証することを目的とした。実践を通して、主体的な対応ができていること、動きが多様に広がるとともに質的变化が見られたことが認められた。また、無意図的な模倣から意図的な模倣に移行している。これらから、リズム遊びは、広汎性発達障害児のコミュニケーション能力の向上に有効であることが実証できた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine potential effect of group rhythm playing with the use of five teaching materials in order to improve communicative competence of children with pervasive development in the intellectual disabilities education. Through the analysis of practices, the research finds qualitative changes in terms of children's positive response as well as their wider varieties of movement. Furthermore, their reactions are changed from accidental imitation to intentional one. In conclusion, this study suggests that group rhythm playing has positive effects on improving communicative competence of children with pervasive developmental disorders.

研究分野：舞踊教育学

キーワード：舞踊教育 知的障害教育 リズム遊び コミュニケーション能力 教材開発

## 1. 研究開始当初の背景

知的障害教育においてダンスは、児童生徒の興味関心もあり、古くから多用されてきた。しかし、多くは、音楽療法、芸術療法の一環として行われ、機能回復や体力強化を目的としている傾向があった。

近年、アメリカのモダンダンサーたちによって始められたダンスセラピーの立場から、平井や八木らが、自由な即興表現としての位置づけを提唱し、多くの事例を報告している。また、大橋は、ムーブメント教育(遊びを原点とした発達教育)を提言した小林の理論を応用し、「共創力」をテーマに創造的な活動を通じたコミュニケーション能力の育成と体づくりについて理論と具体例を提案している。

しかし、広汎性発達障害児における実証的研究は未だ少ないのが現状である。

研究代表者(茅野)は、これらの研究を踏まえ、また、舞踊教育が提唱してきたリズム、かわり、表現の観点でリズム遊びを位置づけ、本学教育学部附属特別支援学校小学部児童に対し、既に多くの実践を積み重ねてきた。また、特別支援学校や小中高の教員並びに障害児をもつ保護者に、実践を通して有効であった内容を伝達し、成果をあげてきた。

本研究では、縦断的、横断的な実践を通して、その有効性を動作学的手法(表情、姿勢などの分析)並びに指導者や保護者へのインタビュー等により実証し、質的分析を基に共有できる授業モデルを構築しようとしている。より客観的な方法による検証が今後の課題となる。

## 2. 研究の目的

本研究では、知的障害教育におけるリズム遊びの有効性について、特に広汎性発達障害児が抱えている問題点である対人関係、コミュニケーション能力開発などの面から、実践を通して検証し、典型教材として提示するこ

とを目的としている。既に平成20年度から24年度の間、本学附属特別支援学校において10回以上の実践を重ねることによって、友達と相互にかかわろうとする意欲、身ぶりの使用、視線などについて、リズム遊びが有効に働きかける可能性を実感しており、科学的な分析によって立証し、普遍的なものにすることが課題となっている。縦断的、横断的な資料により、共有できる教材を開発することは、特別支援学校だけではなく、小学校現場においても活用できる汎用性のある研究成果となる。

## 3. 研究の方法

特別支援学校における実践効果を明らかにするために、観察並びにビデオ収録による動作学的分析を行った。以上の結果として、知的障害教育において、実践力のあるリズム遊びを確立するとともに、その効果を定量及び定性面から理論的に解析し、両者を併せた普遍性のある教材開発を行った。

### (1) 実践内容等について

実践は知的障害教育校の教育課程の一環として、小学部全員で行われた合同授業(45分間)の計8回であり、1回の実践は30分~40分である。そのうち後半の5回を検証した。

対象は小学部児童(1年~6年)であり、人数は11名~18名であった(実践における分析対象児については、保護者から研究対象となることについての承諾書をいただいている)。

指導は筆者が行い、学部教員が (Team Teaching) として関わった。

### (2) 分析方法

実践場所に指導者側の両側から固定カメラ2台を設置し、実践記録を撮った。

その実践記録から、指導者の指導言語及び行動を逐語的に記録するとともに、それに対する児童の反応(活動)を全体と抽出児童5

名について具体的に記録して分析を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 5つの教材のねらいと内容

集団リズム遊びでは、一人一人の自由性や創造性を重視することで、自尊感情を高め、そのことが他者との関わりを豊かにするように運んでいく。具体的には、児童の動きを認め、称賛することを通して、自分も「できる」、「やりたい」という思いを強くするようにしている。

実践した5つの教材は、以下のようなねらいと内容により行った。

動きの拡大と自己表現をめざした「おちたおちた」

この活動のポイントは、10秒の短いひと流れが5回続くように構成されているアップテンポな曲にある。学習の流れは、連続と静止という「ひと流れ」の動きを繰り返す楽しさを基本にして、徐々に動きを大きく、多様にしていくように展開する。この1フレーズの単位を基準として、内容にバリエーションをつけて展開するが、子どもたちの様子をよく観察して、子どもたちの動きを取り入れながら、動きを拡げていく。そのねらいの柱の一つが運動課題であり、他の一つが創造性・表現力である。

他者と関わることを意図した「キツネとガチョウ」

簡単なリズム遊び(歌遊び)にしている鬼遊びであり、リズムに合わせて動きながら、キツネ(指導者)と子ガチョウ(子どもたち)が向き合っ、かけあいで問答をするという部分を大切にしている。

友達と協力して主体的に運動することを意図した「ロンドン橋落ちた」

「ロンドン橋落ちた」は歌遊びにゲーム的な要素を含めたものである。指導者と教員が両手をつないでつくる橋(ゲート)をくぐって行き、最後の歌の部分で橋が落ちてきて中

にいた児童がつかまるという遊びである。

子どもたちの得意な動きや好きな動きを取り入れてリズムカルに動く楽しさの体験をめざした「ホ!ホ!ホ!」と「ぼくのミックスジュース」

「ミックスジュース」は、児童が容易にできると観察された、回る動きやかいぐり(両手を体の前で上下に糸巻きの要領でぐるぐると回す動き)を含めて、筆者が振付したものである。

##### (2) 全体的考察 - 集団の中で学びあう子どもたち -

第5回目の実践の最後の場面で、指導者が「今ね、Aちゃんがいいこと教えてくれたの」と紹介した時、A児がカエルの跳ぶ真似を実践し、それを見ていたB児、C児が「こんなことできるよ」と、自分の動きを主張するのを見ると、子どもたちは集団の中で多くのことを学んでいることが認められる。それは、B児が自分の動きをした時に、多くの子どもたちが、B児の方に注目していることでも明らかである(写真参照)。



ほかにも、「キツネとガチョウ」の実践で見られた指導者の後ろに7名の児童がつながった電車の動きや、「ロンドン橋落ちた」での他児を見て橋の役になりたいという要求など、集団の中で他の児童からの刺激を受けてのものであり、集団リズム遊びにおいては、そのような周りの児童の行動や言葉がきっかけで子どもたちの世界が広がっていく様子は、様々な実践で見られた。

以下、自閉症スペクトラム児4名とダウン

症児1名の事例を報告する。

(3) D児について(自閉症スペクトラム)

D児は、一見反応が乏しいように思われたが、後方で小さな動きであるが、真似している様子が映像記録から数多く散見された。第1回の最後の「おちた おちた」で、指導者の動きを見て、真似して動きを変えた授業記録は、コミュニケーションの改善における可能性を感じることができる発見であった。

D児からは、何も反応していないように見えて、よく観察すると微細な動きで自分なりの模倣をしていること、指導者がしっかり観ることの大切さを教えられた。

(4) E児について(自閉症スペクトラム)

E児は、当初はあまり主体的な反応を見せることは少なかったが、「キツネとガチョウ」で鬼ごっこを楽しんだあたりから、指導者に積極的に関わろうとする傾向が見られた。第2回後半のミックスマックスでは、指導者の話にうなずいたり、手を挙げて「はい」と言ったりするなど、積極的な反応がみられた。特に第3回のキツネとガチョウでは、常に指導者の近くに集まり、「あー、あー」と指さし、何かをしきりに訴えかけていたが、それが何であるかを最後まで確認できなかった。

(5) F児について(自閉症スペクトラム)

F児は第1回までに既に13回の実践を行っている。

第1回の授業記録を見ると、「おちた おちた」の止まった時のポーズがその都度変化しており、また、いろいろな人とタッチができるなど、これまでの学習が汎化したのではないかと考えられる。

常に指導者である筆者に向かって様子が見て取れ、各回とも自分の動きをアピールしていることが認められた。しかし、第1回ではF児の主張を筆者がうまく受け止められなかったり、第3回では、F児の名前を間違えたりし、そのことが筆者に対する拒否的な行動(キツネとガチョウでつかまえよう

として足で払うような動きをしたり、筆者の腕をとらえて直立姿勢にさせようとしたり)につながったのではないかと推察される。第4回、第5回では得意な動きを認められたことにより、F児の真似をして泳ぐように床に伏せた時に筆者に接触する様子が見られ、筆者との距離が縮まったように感じられた。

F児からは、多くの発信を指導者が確実に受け取り、それを認め、称賛することで指導者と児童の関係が深まること、その信頼関係の中で、さらに多くの発信が観られることに気づかされた。

(6) G児について(自閉症スペクトラム)

G児については、初めて参加した1回目と2回目の実践を比較した。

「おちた おちた」の曲と動きは日頃の学習活動の中でも実践しているようで、その場での手拍子、膝打ちはリズムにあわせてできる。また、G児の中では、しばらくその場で走って、周囲を走り回るといったパターンができていくらしく、曲がかかると自発的に立ち上がり、動き始める。

しかし、「あ」の部分で止まることができない。

2回目の実践では、「走る - 止まる」のひと流れが、僅かに動きとなっている。しかも、「あ」の部分で指導者の真似をして、いろいろな身体部位をタッチするという動きは、ワントーン遅れるものの、指導者の方を見ながら、適切に真似できている。1回目では、指導者の方を見ることもほとんどなく、また真似をすることもできなかった。

「ミックスマックス」も日頃の学習活動の中で既習であるということであり、G児は、初めて参加する1回目からある程度動くことができていた。特に、手を上げて回る部分とかいぐりは、概ね真似でき、嬉しそうに動いている。

しかし、両手を斜め方向に上げる動きは、真似はできるものの、真上に上げて飛び跳ね

る動きになりがちであった。それが、第2回では、写真のように、左に曲げて左斜め上に伸ばす、右に曲げて右斜め上に伸ばすという動きに進歩していることが認められた。このとき、G児は明らかに指導者の動きを見て真似をしている。



「ロンドン橋おちた」では、G児は、教員間に挟まれて手をつなぎ円周上を歩いていくが、第1回目では右斜め後方に進んでいるため、教員に引っ張られているという感じが強い。また、指導者の説明時に多動的傾向がある。

2回目では、ゲームを楽しむというところまではいかないものの、落ち着いた様子が見られ、歩き方も前方に向かって進んでいる。

1回目では、リズムの遅速、2回目では途中で歌が止まるという変化をつけて実践をしたが、教員と共に対応ができていた。特に2回目では、速いテンポの時に、弾むような駆足になっていたことがわかった。

#### (7) H児について(ダウン症)

H児はダウン症児である。一般にダウン症児はダンスが得意で自由な発想による表現をすることができる反面飽きやすく自分勝手な行動を起こしがちであると言われている。

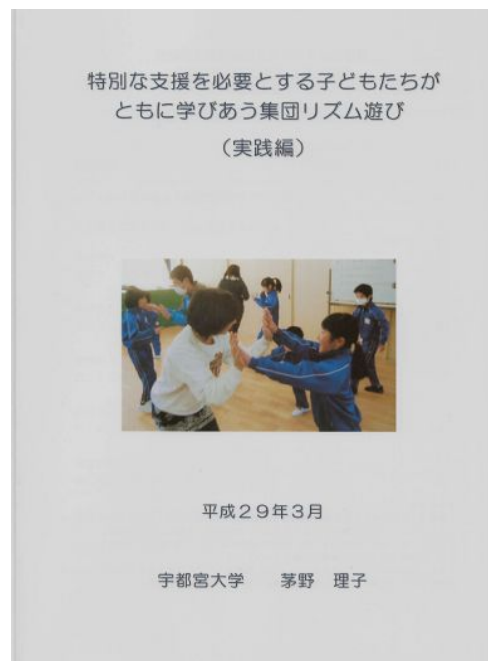
しかし、H児は集中力も高く、また乱暴な様子も見られず、意図的な表現力の豊かさがある。トンボやカエル、ストローで飲むしぐさ、ホースで水を撒くしぐさ、また好きなジュースを即座に言えたり、「美味しいね」な

どの反応ができたりする豊かな感受性を感じることができた。

しかも、第2回の活動において、H児が指導者の動きをじっくりと観察し、ヒールポイントをするなど、指導者と全く同じような動きになっているその集中力の高さを認めることができる。

H児からは、模倣活動から言語活動への進展や表現運動への発展の機運とともに、リズム遊びを通して集中力や改めて表現力が高まることを認識することができた。

以上の結果から得られた内容を実践編としてまとめた(総26ページ)。



#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

茅野理子、知的障害教育における集団リズム遊びの実践事例 - コミュニケーション能力への働きかけを意図して -、宇都宮大学教育学部研究紀要、査読無、第1部67、2017、pp.131 145

<http://uair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/handle/10241/10617>

茅野理子、集団リズム遊びが自閉症スペクトラム児のコミュニケーション能力に働

きかける可能性について - 模倣と始発に着目した一考察 -、舞踊教育学研究、査読無、18、2016、pp.25 32

茅野理子、知的障害教育におけるダンス教材の指導実践と課題について - 小学部教育課程を中心に -、宇都宮大学教育学部研究紀要、査読無、第 1 部 66、2016、pp.169 181

<http://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/handle/10241/10234>

茅野理子、知的障害教育小学部におけるリズム遊びの実践事例 - リズム遊びを通じた他者とのかかわりを中心に -、舞踊教育学研究、査読無、17、2015、pp.55 56

茅野理子、特別支援学校におけるリズム遊びの実践事例、宇都宮大学教育学部教育実践紀要、査読無、1、2015、pp.237 240  
<http://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/handle/10241/9961>

茅野理子、知的障害教育におけるリズム遊びの実践事例 - 小学部児童のコミュニケーション能力への働きかけを意図して -、舞踊教育学研究、査読無、16、2015、pp.45 46

茅野理子、表現あそび「リズム、かかわり、表現を大切に」、女子体育、査読無、57 8・9、2015、pp.20 25

[学会発表](計5件)

茅野理子、知的障害教育校の自立活動に資する教材開発とその検証 - 小学部における集団リズム遊びの実践 -、第 36 回全国創作舞踊研究発表会、2016.12.17、ぎふ清流文化プラザ(岐阜県・岐阜市)

茅野理子、広汎性発達障害児のコミュニケーション能力に働きかけるリズム遊びの教材開発、日本体育学会第 66 回大会、2015.8.27、国土館大学(東京都・世田谷区)  
茅野理子、知的障害教育小学部におけるリズム遊びの実践事例 - リズム遊びを通し

た他者とのかかわりを中心に -、第 34 回全国創作舞踊研究発表会、2015.2.8、筑波大学(茨城県・つくば市)

茅野理子、知的障害教育におけるダンス教材の指導実践と課題について - 小学部を中心に -、第 66 回舞踊学会、2014.11.30、日本女子体育大学(東京都・世田谷区)

茅野理子、知的障害教育におけるリズム遊びの実践事例 - 小学部児童のコミュニケーション能力への働きかけを意図して -、第 33 回全国創作舞踊研究発表会、2014.12.21、とりぎん文化会館(鳥取県・鳥取市)

[図書](計1件)

茅野理子 他、教育出版、動きの「感じ」と「気づき」を大切にした表現運動の授業づくり、2014、Pp.167 (pp.116 121)

[その他](計2件)

実技講習

(公社)日本女子体育連盟平成 27 年度夏期講座 BC コース講師、2016.8.19、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)シンポジウム開催

基調講演 2 題:池本喜代正(宇都宮大学)、佐分利育代(鳥取大学名誉教授)、実践報告 2 題:熊谷佳代(岐阜大学)、茅野理子(宇都宮大学)、2017.3.4、宇都宮大学(栃木県)

6. 研究組織

(1)研究代表者

茅野 理子(CHINO、Masako)

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号:60125812

(2)研究協力者(宇都宮大学教育学部附属特別支援学校小学部)

小菅智恵子(KOSUGE、Chieko)、

小松崎信彦(KOMATSUZAKI、Nobuhiko)、

大類陽子(ORUI、Yoko)、

福田真琴(FUKUDA、Makoto)、 他